

研究論文

互助組の結成から見る中国の国家権力と人間関係

祁 建民*

はじめに

互助組は現代中国における農業集団化の最初の段階である。数戸から十数戸の農民が互いの利益を前提に組織するもので、共同で労働をし、労働力を交換して助け合い、組員の労働力・役畜・農具の不足を補うことを特徴とした。互助組の結成の要因については国家権力と農民の互助伝統といった二つの面から認識されてきた。これに関して、代表的な考えとしては、石田浩と内山雅生の間で対立した見解がある。石田浩はこれまで村内における人間関係を通じて互いに協力しあってきたため、互助組の必要性はあまりなく、「農民が互助組に参加しようとした積極的な理由は別の所にあった。すなわち、互助組に参加することによって国家への食糧販売ノルマである統購統銷の割当料(交售糧)を減らしてもらったこと」¹⁾と主張する。これに対して、内山雅生は共産党の上からの集団化の強制という事実の裏側には、まだ生産力が低い状況にあった農民が、その生産力を向上させるために集団化を認め、その中で活路を見いださなければならないという実情があり、「従って50年代の華北農民の側には、共産党政府が押し進める集団化の受け皿が存在したのである」、即ち「旧来の慣習である「搭客」に見られる相互扶助を機軸とした集団化を押し

進めなければならない社会要因が存在した」²⁾と主張する。

実は、この対立する見解はそれぞれ中国における国家と社会の関係像についての根本的な二つの対立的な理論を表している。一つは、専制国家論であり、国家権力が個々人に至るまでコントロールしていたという考え方である。いま一つは、自治社会論と呼ばれるもので、社会は国家から分離しており、そこには独自の自立性が存在していたとする捉え方である。従来、学界における議論の中心は、この相対立する二つの観点を巡って展開され、多数の成果が産み落とされてきた。だが、今現在、学界が問われている最重要課題は、両者の長所を上手く取り混ぜながら、中国における国家・社会間の相互関係を、どのように総合的に創生すればよいか、という課題に対する明確な解答を用意することである。本稿では、一九九〇年代以来の現地調査の資料を利用して、互助組の結成から国家権力と人間関係との関係を再検討し、以上のそれぞれの理論を検証していきたい。

I. 調査の経緯と報告書

本稿では主に『中国農村慣行調査』³⁾(以後『慣行調査』と略称)と『農民が語る中国現代史』⁴⁾(以後『農民が語る』と略称)、『中国農

*長崎県立大学国際情報学部教授

村変革と家族・村落・国家 華北農村調査の記録⁵⁾(以後『華北農村調査』と略称)及び近年まとめた農村調査報告書などの調査資料を利用する。

『慣行調査』とは、日中戦争中、末広徹太郎の指導下に行なわれた華北農村の家族、村落、土地所有、小作、水利、公租公課、金融及び取引など、農村社会のあらゆる生活規範を、法社会学的な方法により精細に記録した調査資料であり、その目的は「中国の民衆が如何なる慣行の下に社会生活を営んでゐるか、換言すれば、中国社会に行なわれてゐる慣行を明らかにすることによって其社会の特質を生けるがまゝに書き出すこと」であった⁶⁾。「この『慣行調査』は、農民との応答録を手を加えずにそのままの形で記録するとともに個々の農家の家族構成や家計についても詳細な資料を残しており、革命以前の中国農村の実情を検討するうえで他に類をみない貴重な文献資料といえる」とされる⁷⁾。末広徹太郎はかつてヨーロッパ留学し、法社会学の影響を受けており、末広がこの調査を行なうに際し重要視したポイントは以下のようなものである。「既成の法的概念に捉はるゝことなく」、「標準村落が選択される」、「其規範の実効性」、「調査が進むにつれて逆に要綱に検討を加えて」いくこと。また、「法的慣行は所謂「生きた法律」に相当するものであるから、元来固定不動の形に於て存在するのではなくして、現実の生活と共に流動的に生きてゐるものである。」⁸⁾『慣行調査』は村落社会での「生きた法律」を対象とした。その知見は今日の時点においても、地域社会の研究に対して、有効な方法と思われる。主要調査村落として当時の河北省順義県沙井村・欒城県寺北柴村・昌黎県侯家营村・良郷県呉店村・山東省歴城県冷水溝莊・恩県後夏寨の六村落が選定され、調査がなされて

いる。この調査資料の原版は『華北農村慣行調査計画』に基づいて満鉄北支経済調査所より謄写印刷されたいわゆる「質問応答録」であり、ドライタイプ版一四輯(累計一二三巻)で、一九五二年から五八年にかけて、仁井田陸をはじめとする「中国農村慣行調査刊行会」によって刊行され始めた。

しかし、日中戦争の背景によって、インタビューの対象は村落リーダーに限られ、農民の答えは(緊張しているので)機械的に答えている、県城に近い地点であること、共同体理論の影響を強く受けているなどの制限もあった。

『農民が語る』と『華北農村調査』は『慣行調査』の調査村の五〇年を隔てた再調査の記録である。この調査の特徴は、「(一) 先進的なモデル農村ではないごく一般的な村を対象に、(二) 老農・幹部経験者・村落婦人・農村教師・農民企業家など農村の諸階層から聞き取り調査を行なうことで、(三) 一九四〇年前後を起点とする五〇年間の農村変革の歴史的過程を追跡したこと、そして何よりも、(四) 農民との質問応答録を原則としてそのまま収録することによって村落社会の多様な面に照明を当て、村民の視点に立った家族史・村落史の再構成を目指した点、にある」⁹⁾。主要な調査村は、現在では北京市に属している沙井村・呉店村、天津市に所属する馮家村(かつて慣行調査班では『何となく不気味な空気』を感じてすぐに調査を打ち切ったため、この村についての資料は五頁ほどしか残されていない)、山東省の後夏寨(現在は平原県に所属)、河北省の寺北柴村の五村である。この調査は三谷孝(一橋大学教授、当時)、魏宏運(南開大学教授)をはじめ、論者自身も参加しており、日中の学者によって六年間にわたり共同調査をおこなった¹⁰⁾。

調査の経緯とデータは次の通りである。沙井

村調査：一九九〇年八月・聞き取り調査延べ二五人、一九九四年八月・聞き取り調査延べ五二人。呉店村調査：一九九〇年八月・聞き取り調査は延べ三二人。馮家村調査：一九九一年八月・聞き取り調査は延べ四二人、一九九三年三月・聞き取り調査は延べ五三人。後夏寨調査：一九九三年三～四月・聞き取り調査は延べ八六人、一九九四年八月・聞き取り調査は延べ五七人。寺北柴調査：一九九四年一二月及び一九九五年二月・聞き取り調査は延べ七二人、一九九五年九月・聞き取り調査は延べ九二人。

『慣行調査』と『華北農村調査』及び『農民が語る』が対象として調査を実施した村の中で、全く重複する形で再調査できた村は、沙井村、寺北柴、後夏寨三つの村及び馮家村、呉店二つの村である。つまり、この五つの村に対しては、一九四〇年代と一九九〇年代に二回の調査が行なわれたことになる。本稿では主に沙井村、寺北柴、後夏寨の、三つの村を対象として検討を加え、また、補充として、馮家村と呉店の二村で得られた資料も参考とするものである。

その後、前の調査の延長線として次の二つの調査も実施した。(1)平成一七～一九年度は文科省科学研究費補助金の交付を受けて山西農村で現地調査が実施された¹¹⁾。高河店村で一〇二人を対象に聞き取り調査が行われた。その成果として『中国内陸地域における農村変革の歴史的研究 平成17年度～平成19年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書』(平成20年5月)をまとめた。(2)平成二二年より五年間、文科省科学研究費補助金の助成によって山西省P県D村で実施することになる¹²⁾。調査報告書の一部としてすでに上梓した¹³⁾。

Ⅱ．互助組の結成と人間関係

まず、互助組からスタートした集団化は、村落にすでに存在していたさまざまな人間関係や、以前からの互助慣習との関係の中で実施された。

互助組の結成は井戸の共同使用の慣行と関連していた。寺北柴村の劉宝(保)貴は、彼の祖父が参加した互助組には劉喜毛、劉建祥、劉大脏、劉老丑、劉連生の五家が参加しており、それは全員の土地が互いに地続きであり、その中に井戸があったため、井戸を一緒に利用していた¹⁴⁾。

相互扶助のために互助組は結成された。郝老艶が参加した互助組は寺北柴村で最初の互助組であり、この組には張歪子が参加していた。張歪子は家畜を所有せず、一方で郝老艶は所有していたので、互いに助け合った。組にはさらに、劉瓜子、郝沙小、郝黒蛋が参加していた。郝老艶は家畜や大車を所有していたが、人手が足りなかった。一方で彼らは家畜を所有していなかったため、相互扶助を行った¹⁵⁾。

土地が近接しているか、仲が良かったために互助組を結成した¹⁶⁾。このような組は生活水準が似ており¹⁷⁾、また同姓の人が同じ互助組に参加していた場合もあるが、その理由は同族共居か、或は同族が近くに住んでいたためであった。しかし、単に同族だけではなく、関係の良いもの同士が一緒になった場合もあった¹⁸⁾。

以上見てきたように、互助組の結成には多重的な要素が含まれており、それは井戸の共同という伝統的な習慣のほか、用具の互助もあり、さらに、耕地が地続き、住いが近い、生産条件が大部分同じであることなどであった。ここでは、宗族関係は際立っていないが、鍵となるのは参加者の人間関係が良いということであっ

た。

他の村の様子を見た場合、上述の点はより明確なものとなる。

後夏寨の王志遠の互助組は八戸で季節性があった。王志遠によれば、「我々の関係はとてよかった。忙しい時に助け合い、一緒になった理由は、「気の合うことが第一」であった¹⁹⁾。

馮家村の孫玉常によれば、「関係の良い人と一緒にやったのもあるし、隣近所で一緒にやったのもある。」²⁰⁾呉金城によれば、互助組は「仲の良い者同士で組織され」²¹⁾、鄭宝明の場合、互助組の「一〇戸は友人で関係がよかった。」²²⁾

高河店村の茹長録によれば、「互助組は隣人間で組んだ。開放前と同じだ。」²³⁾王玉生によれば、「互助組は近隣または関係のよい人とやった。」²⁴⁾茹長寿によれば、「互助組成立の要因は、仲間、仲のよいこと。」²⁵⁾徐元録によれば、「グループ構成は、仲のよい隣人が基本。」²⁶⁾茹明亮によれば、互助組は「家族同士で仲がよい人」、「土地に近いこと」などの理由で成立した²⁷⁾。張敬堂によれば、「農民互助組は農民が自由に結成した、仲良しの農民と結成した。」²⁸⁾互助組の「多くは、隣人や土地が隣接している者と組んだ。遠くに住んでいても、関係がよい者であれば組むことができた。」²⁹⁾

山西省P県D村のWWZによれば、「互助組に参加した。5、6人で結成した、仲のよい者同士だ。」また、THQによれば、「互助組に参加した(18歳の時)、7、8人で作った、関係のよい者同士、協力して作業をした。」³⁰⁾ほかの村民も、互助組は「一般的な協力は隣人・親戚・友人とやることが多く、労働生産で相互扶助を行うもので、報酬はなかった」といった³¹⁾。

農民へのインタビューからも明らかにされた

ように、互助組の結成に際して、生産の互助などの経済利益と利便性よりも、人間関係が重視されていた。互助組の結成は国家の呼び掛けに応じたものであるが、互助組のメンバーは個人的関係による自由な組み合わせの中で成立し、元々の人的結合関係は取り消されることはなかった。

Ⅲ．互助組と搭套

互助組と昔の「搭套」³²⁾とは密接な関連性を有していた。例えば、沙井村の楊福の場合は、解放前、隣の張書氏と「搭套」した。解放後も、張書氏と、杜維新の三軒で「搭套」をした。「初めは搭套だったが、後に互助組と呼ばれた」³³⁾。

内山雅生が指摘するように互助組と「搭套」は関係があり、その関連性は人間関係によるものといえるだろう。しかし、組織としてみれば、その差違も顕著に存在した。即ち、「搭套」は二、三軒の農家の間に相互扶助を行い、農家同士は平等な立場で相談して生産面において協力した。互助組の成員数は「搭套」より多く、三、四戸から十数戸ほどであり、閉鎖的な面を持つことはなく、徐々に拡大していった。特に互助組には、その中に組長、副組長が置かれていたが、この組長は大体村内の幹部であり、国家の意思を代表していた。村民によれば、「互助組では正、副の組長が党の指導を得ており、大衆の思想も良い。」という特徴があり、そのメンバーは、管理者と被管理者というように分けられた。互助組の組長が「農民を仕事によって分けて、仕事の開始や終了を調整して」おり³⁴⁾、また、沙井村では、一時この村の戸数に応じて組の数が決められ³⁵⁾、村幹部によって互助組が調整された。

互助組はメンバーが多いため、利益の計算も

細かく、この点も「搭套」とは異なっていた。互助組において、労働は等級に分けられ、労働量は「分数」で計算された。ただ組員に対して労働支援をするのではなく、後でお金により相互決算を行うというものであった。その際、「搭套の場合、双方の出した労働量は多少差があっても互いに気にしない」のが一般的であった。互助組の組員が出した労働力、大車、役畜は「工」数で記録し、秋に決算された。一畝あたりどれくらい「工」を必要とするのかを計算した上で、必要「工」数に足りない時にはお金で補填した³⁶⁾。例えば、沙井村の互助組は「平工找価」で行われており、最終的に相互決算を行った³⁷⁾。また、「斉工等価」という制度も存在した。「斉工等価」とは年度末に切り揃えることで、略して「斉工」という。つまり労働力と家畜の供出数から収入の額を除いて、等価分配するというものであった。例えばこの家畜は力があるので一〇点、あの家畜は弱いのので八点、また人力も一〇点、九点、七点などに等級付けがなされた。最後に組全体の点数と各家の土地で使用された労働力の合計を出し、比率により取り分をきめる³⁸⁾。また、高河店の農民によれば、「解放前の互助は換工と呼んだ。互助組とは性質が異なった。換工の時は労力を出、必要時に協力、互助組の時には大車、家畜などそれぞれが所有する農具を共用した。」³⁹⁾山西省P県D村の村民によれば、「仲のよい十数戸の家で互助組を組織し、農作業を手伝い合ったが、耕牛、馬(大型農具付き)は代金を支払って使用した。また、牛や馬を持っていた家には粉挽きの時にも代金を支払った。」⁴⁰⁾

「搭套」と比べると、互助組は公式なものであり、行政的な性質が表れていたため、互助組と「搭套」には組織と管理方法における性格の違いが大きいと考えられる。

IV. 互助組の結成と国家意思

大部分の互助組について、農民自身はその結成が国家の「命令」によるものであると認識していた。これは大勢の村民の聞き取りによって明らかにされた。

寺北柴村の村民インタビューによれば、互助組を作ったのは「上からの命令だからやらなければならず」⁴¹⁾、「工作隊が村に滞在していて、そうした道を歩ませるのだから、仕方がなかった。」ため⁴²⁾、「上級の命令で互助組を作った」⁴³⁾。

沙井村の村民インタビューによれば、「上級から幹部が検査にやって来て、互助組を成立させた」⁴⁴⁾。互助組の成立は「何と言っても政府の命令」であり⁴⁵⁾、「自主的参加というが実態は命令」であった⁴⁶⁾。上級の呼びかけの下、村の指導者たちは組織されたため⁴⁷⁾、「互助組は政府の呼び掛けの結果」であった⁴⁸⁾。

後夏寨の村民インタビューによれば、「思想教育を経て参加させられたのだ。」⁴⁹⁾「思想教育が大事だ。この点がしっかりしていないと、必ず個別に経営して、集団化には参加しない。」⁵⁰⁾「互助組は上級の命令だ」⁵¹⁾。

馮家村の村民インタビューによれば、宣伝を行い、大会を開いた後、村民に申し込みをさせており⁵²⁾、互助組は村の指導で成立した⁵³⁾。上級から人が来て会議を開き、お互いに労働力を提供しあえば、金はかからないと説明された⁵⁴⁾。

高河店村の村民インタビューによれば、「互助組は1953年に上部からの指示で結成した」⁵⁵⁾。また、「政府の呼びかけに応じて自発的に組織した」⁵⁶⁾。

山西省P県D村の村民インタビューによれば、「上からの呼びかけに応じて、みんなに

互助組の組織化を呼びかけ、投票で組長になり、30戸余りが参加した」⁵⁷⁾。

以上の各村の農民に対する聞き取りによれば、互助組の成立が国家の思想動員と行政命令の結果ということは極めて明白であり、大部分の農民の言によれば、決して自発的な集団化ではなかった。このことは国家権力の強大さを十分に示している。農民の回答によれば、いずれも上級の命令の結果と言い、なおかつ上級から人が村に来て指導監督したという。もちろん、国家も他の手段を利用して農民を従わせており、例えばそれは利益誘導であった。利益誘導の際、国家は救済、資金、公糧給付の面で、集団に参加した農民のみを援助した。

政府の食糧援助は互助組のメンバーのみを対象とした。寺北柴村の趙栓柱の聞き取りによれば、食糧が不足し、食べ物がなくなった場合、国がトウモロコシや米などを与えたが、入社していない場合は、与えなかった⁵⁸⁾。

政府は互助組へ資金を貸し出し、農薬、化学肥料を給付した。徐孟祥のインタビューによれば、以前は農具がなかったが、上級機関が資金を貸付け、それにより農具を買うことができた。家畜を買う金がなければ、同様に金を貸付け、それには利息のある場合も、無利子の場合もあった⁵⁹⁾。さらに「国家が農薬、化学肥料を給付した。個人経営の農家には給付しなかった」⁶⁰⁾。寺北柴村の隣村北五里鋪村の張九東のインタビューによれば、政府が貸付をして、入社を促させ、入社の場合、貸付の返還義務がなかった⁶¹⁾。湖南省のある郷長は貸付を要求する農民にこのように言った。「君は互助組に参加しなかったら、貸付を交付しない。これは私によって決める。」⁶²⁾

政府は他の面でも、互助組に便宜を与え、そうすることで農民に互助組に参加した方が良

いと感じさせた。沙井村の李広明のインタビューによれば、年末に公糧を納入する時、食糧庫は合作社に参加しなかった者からは受け付けなかったので、農民たちは入社した方が有利であると考えた⁶³⁾。「当時の形勢(状況)は、集団化に参加するしか方法はなかった。(周永興)⁶⁴⁾

政府は互助組に参加した農民だけに食糧、農薬、借款(低利が甚だしい場合は償還不要)を提供し、また、公糧納入では個人経営農民を差別し、彼らの灌漑用水も保証しなかった。このため農民は国家が指定する合作化に従わざるを得ず、そうしなければ生きる方法がないと痛感させられた。

互助組の成立は、主に国家意思によって決められた。共産党政権は政治宣伝、行政命令、利益誘導などの方法で互助組を成立させ、硬軟両様の手段を併用し、村落の人々をその意思に服従させた。しかし、このような国家の強権の実施も、元々の社会結合関係を完全に排除することができず、反対に村落は固有の社会結合を基礎として、柔軟に国家の意志に適応していった。互助組は形式上国家からの要求により設置されたが、その内部成員間の関係は、むしろ個々人の友好関係を基礎としていた。国家意志は元来の社会結合関係を破壊することはできず、社会結合もまた国家意志と対立的な姿勢を取ることはなかった。互助組の形成は、国家意志と農民の習慣との結合的産物であり、その性格は国家行政の編成と村落固有の社会結合という二つの性格を有していた。山西省の中共古參幹部高華によれば、「互助組の結成は上(政府)からの呼びかけもあったが、農民の側からも要求があった」⁶⁵⁾。内山雅生が提起された「集団化の受け皿」も確かに存在していた。

V . 村幹部と互助組の結成

各村の互助組の発起人はすべて村の幹部であり、国家権力の末端に位置して国家の呼び掛けに積極的に応じた。馮家村の村幹部郝開順は次のように述べた。土地改革と集団化の間に、「村政府が社を指導し、社には社長が」おり、「積極的に合作社を組織するように上級からの呼び掛けがあったため、村の幹部が社のリーダーになった」⁶⁶。まさに、互助組の成立を通して、村落では彼らを中心とした新たな人的結合が編成され、このような人的結合は国家権力を軸とするという構造を持っていた。

寺北柴村で最初の互助組の発起人は村幹部の徐孟祥であり、一九五五年に成立した。メンバーには徐孟祥、徐小和、徐小眼、徐鎖成、徐郡山、徐振山がおり、最初に互助を呼びかけたのは徐孟祥と徐小和であった⁶⁷。

沙井村では、村幹部の張麟炳が一九五一年には互助組の組織化を行っていた。この互助組は当村で一番早いものであり、村幹部の治安と保衛（警備）担当の李広明、民政担当の杜欽賢も参加した。参加者の中には幹部が多く⁶⁸、張麟炳が組長となった⁶⁹。共産党員の「李祥林には組織力があったので、彼の力量で、大きな互助組とな」り⁷⁰、はじめの初級社の社長は李祥林であり⁷¹、他のメンバーには景德福、李秀芳がいた⁷²。

後夏寨村の互助組と初級社は、党員が中心になって運動が始められた⁷³。村で一番早い互助組の呼び掛け人である馬鳳山は、一九四七年

に解放軍に入隊し、同時に共産党に入党し、一九五五年に復員した。互助組は「党の指導」によるものであり、一二戸、五〇人からなっていた⁷⁴。

馮家村の「互助組は村の指導で成立した」⁷⁵。最初に参加したのはほとんど幹部であり、メンバーは郝開甲、劉連昇、劉連元、張樹森、宋玉良、郝開順であり⁷⁶、共産党員呉金城は互助組の「先鋒隊」に参加した⁷⁷。土地改革時の民兵隊長（後に村長）の王萬山は互助組の副組長であり⁷⁸、当時、「全党辦社」を提起した⁷⁹。

山西省P県D村のWZXは土地改革時代から村の幹部になった、村の最初の互助組の組長であった。村民のWXRによれば、この村では、「小さい頃、私はWZXとよくいっしょに遊んでいたので、WZXが責任者となっていた互助組に参加した」⁸⁰。

各村落において、土地改革開始時からの幹部は、国家からの集団化の呼び掛けに対する積極的な呼応者となり、互助組はいずれも彼らが先頭となって組織し、その中核となった。これらの人々には中国共産党員、村幹部、青年団幹部、民兵幹部、人民解放軍の退役者及び土地改革の積極分子と貧農が含まれ、彼らは皆、土地改革の受益者であり、訪問調査の時、彼らはいずれも互助組を最初に組織し、参加したことを自慢していた。

また、筆者は山西省太原市農業合作史の資料を利用して、各互助組の結成の経緯を調べて次の表を作成した。

村落名	互助組の規模	成立時期	指導者	成立の経緯
清徐県趙家堡村	互助組一つ、4世帯、49 5畝	1950年	李成績（村の党支部書記長）	党の大生産を盛んに行う呼びかけにこたえる

陽曲県城晋澤村	互助組七つ、合わせて100世帯	1951年	栄茂昌(村の党支部書記長)など7人	党と政府の指導を受ける
古交市火山村	互助組一つ、5世帯	1950年	楊三何(民兵中隊長)	上級の指導を受ける
北郊区后王村	互助組一つ、10世帯、32人	1951年	馮元、王鈺(村幹部)	1年後解散した。1952年、上の指示をうけて、二つの互助組を組織した。
南郊区大寺村	互助組四つ	1951年	張進徳(村主任)など3人	党と政府の呼びかけにこたえる
陽曲県北留郷上庄村	変工組一つ、3世帯、耕地102畝	1949年	朱文華(党員幹部)	生産を盛んに行うために
北郊区小井峪村	互助組三つ、合わせて15世帯	1952年	魏達三、魏紳	毛沢東の「結成しよう」の呼びかけにこたえる
婁煩県葦院坪村	互助組を経て農業合作社	1951年	段新春(村の党支部書記長)など5人の党員	毛沢東の「結成しよう」の呼びかけにこたえる
南郊区晋源南街	互助組一つ、8世帯	1951年	王変全(1952年三つの互助組が新たに結成、その中二つの組長とも党員)	党の「結成しよう」の呼びかけにこたえる
清徐県西羅村	互助組二つ	1951年	梁良児(党員)、郭丁旺(解放区から帰った青年)	生産手段は不足なので、助け合う
古交市会立村	互助組三つ、30余世帯	1952年	閻辛未、閻三巴、徐石信	上級の呼びかけにこたえる
南郊区西草寨村	互助組一つ、7世帯	1953年	龐四牛(党員)	党の「結成しよう」の呼びかけにこたえる
南郊区花塔村	互助組一つ	1952年	李根柱(貧農)	党の呼びかけにこたえる
北郊区呼延村	互助組二つ、12世帯	1952年	李柱児(民兵連長)、白福泉ら(村民)	党中央、毛沢東の「結成しよう」の呼びかけにこたえる
陽曲県周家山上後背村	互助組一つ、四世帯	1951年	王振躍(貧農)	生産手段は不足なので、助け合う
南郊区趙家山村	互助組一つ	1951年	楊風元	不明
北郊区柴村	互助組一つ	1951年	陳素珍(夫は解放軍に入隊、陳は労働模範、市の集団化研修班のメンバー)	毛沢東の「結成しよう」の呼びかけにこたえる
南郊区賈家寨村	互助組四つ	1950年	郭景栄(党員)ら	党員たちが県委員会の集団学習に参加した後で結成
北郊区瓜地溝村	互助組三つ	1952年	張徳開(党の支部長)、馬蘭(青年団支部長)、王科(村主任)	郊区によって開催した集団化会議に参加した後で結成
婁煩県新庄村	互助組一つ	1951年	李付平(党員)	不明
古交市河口村	変工隊二つ、28世帯	1951年	閻晋生(貧農)、寇乃只(中農)	党の呼びかけにこたえる

清徐県北社村	変工組一つ、6世帯	1953年	李豊年(党員)	他の村の変工組に倣う
南郊区孫家寨村	互助組三つ、29世帯	1950年	李狗娃(党員)、孫計沢(党員)、孫紅娃(団員)	晋源県委員会の会議に参加した後で、党の呼びかけにこたえる
北郊区新道村	互助組一つ	1953年	農民たち	農民たち自発的に毛沢東の「結成しよう」の呼びかけにこたえる
陽曲県高村	変工組十	1951年	郭傑(党支部長)と党員たち	生産の発展のため
委煩県順道村	互助組一つ	1950年	段二新(党員)、高有娃	毛沢東の「結成しよう」の呼びかけにこたえる
南郊区代家堡村	互助組三つ	1951年	李豊年、武富保、李住只(三人とも土地改革の積極分子)	毛沢東の「結成しよう」の呼びかけにこたえる
北郊区瓦窑村	互助組三つ	1953年	李廷棟(党員)、馬義(人民解放軍退役者)	党の「結成しよう」の呼びかけにこたえる
南郊区石溝村	互助組三つ、19世帯	1952年	馬慶豊(党員)、馬玉明(党員)、李証(貧農積極分子)	不明
北郊区甘草岸	互助組一つ、6世帯	1953年	張大勝(党員)	党の「結成しよう」の呼びかけにこたえる
南郊区北張村	互助組一つ	1950年	李四海(団員)	毛沢東の「結成しよう」の呼びかけにこたえる
陽曲県西郭湫村	変工隊一つ	1949年	安孔泉(党員)	生産の発展のため
古交市郭家梁村	互助組四つ	1951年	李効玉、李効武、李効傲、張鬪威(4人とも党員)	党の「結成しよう」の呼びかけにこたえる
南郊区南馬村	互助組一つ、5世帯	土地改革後	張侯娃(党員)	党の「結成しよう」の呼びかけにこたえる
南郊区西北格村	互助組三つ、14世帯	1954年	劉八魚、劉東元(後で入党)、劉根寿	党の「結成しよう」の呼びかけにこたえる
北郊区新城村	互助組八つ、60世帯	1951年	劉桂花、李振誠などの党員9名	土地改革の結果を強化するため
委煩県尹家窑村	互助組六つ、40世帯	1953年	党員たち	毛沢東の「結成しよう」の呼びかけにこたえる
清徐県南緑樹村	互助組と変工組	1950年	不明	党と政府の指導を受ける
南郊区張花营村	互助組一つ、6世帯	1950年	霍会明(団支部書記長)	党の指導の下で
古交市鄭家庄村	互助組一つ、26世帯	1952年	閻巨禄(党員)	党の「結成しよう」の呼びかけにこたえる
南郊区郝庄村	互助組一つ、10世帯	1950年	黄伝宝(農民)	農民自発的に
清徐県集義村	互助組二つ	1950年	党支部と工作隊	毛沢東の「結成しよう」の呼びかけにこたえる

出典：太原市農業合作史編集委員会編『太原農業合作史・總巻・第一冊・典型村社史』山西人民出版社、1993年

以上の四二の互助組を結成した時、二四の組の指導者は党の幹部と党員であり、四つの組の指導者は村と民兵の幹部であり、二つの組の指導者は青年団の幹部と団員であり、三つの組の指導者は貧農であり、その以外の組の指導者は土地改革の積極分子などである。これによって各互助組の設立は村の幹部と中共党員によって組織することを明らかにした。

Ⅵ．互助組の参加と政治的差別

集団化の時、村落の中には次のような雰囲気を作られた。村幹部を中心とした互助組に参加した人は「先進分子」とされ、一方の参加しようとしぬ人は「落後分子」と呼ばれ、村民の中で区別がなされた。即ち国家意思に従うかどうかによって村民が分類された。

寺北柴村隣村の北五里舗村の馮金相へのインタビューによれば、彼が合作社に参加した理由は「私は若かったし、政治的自覚があった」からという。これに対して、「土地にも良い土地、悪い土地があり、それを一緒にするのは割が合わない」と考える人もおり、そのような人々は「合作社に参加しなかった」⁸¹⁾。徐孟祥へのインタビューによれば、互助組に参加しなかった人は階級成分と関係なく、「自分の農具が充分であり、思想が悪い人は参加しな」かった⁸²⁾。

沙井村の李広明からの聞き取りによれば、互助組が組織された当時、参加しなかった貧農、中農は「思想上の落後分子」と糾弾された⁸³⁾。

後夏寨の馬鳳来へのインタビューによれば、「何か運動が起きると、必ず先進と後進ができる。生産条件が良い者はあえて互助組に入りたくないから入らなかった」⁸⁴⁾。馬鳳山への

インタビューによれば、「貧農は希望通り、中農は不本意」であり⁸⁵⁾、李志祥へのインタビューによれば、「思想的に先進の人が先に参加した」⁸⁶⁾。

当時、村落内の人々は二種類に分けられた。即ち、思想的に良いもの(先進的、自覚がある)と思想的に良くないもの(後進的、落後分子)である。生産条件が良好であるため互助組に入ることを希望しない者は思想的な落後分子と批判され、その際、生産にいかにか有利であるか、個人の権利によって考慮されることはない。互助組に参加しない者は損失を恐れる利己主義者と見なされ、思想的に落後しているとされた。このことは、倫理を重んじる村落において、加入を望まない者に対する非常に大きな圧力となった。

「先進分子」と呼ばれた人は主に貧農であり、彼らは土地改革で利益を受けたが、農具などが足りず、共産党の集団化の推進に対して感情・利益両面から積極的に応じていった。呉店の張啓華は次のように述べた。「土地改革以後、新しく生まれ変わった貧しい者たちは、誰もが喜びに満ち、仕事をするにも力が漲ってきました。党組織による互助合作化の呼び掛けの下で、貧しい者たちは互助組を組織しました。私も互助組に参加しましたが、私は党のした仕事を間違いないと思い、自分は必ず党にしたがって行動しようと思いました」⁸⁷⁾。

「先進」と「落後」の区別以外に、互助組と初級合作社への参加資格には階級区分が関係していた。地主、富農は参加できず、さらに中農・富裕中農も参加が困難であり、村落の中の地主と富農は、その時、自分の身分が低いということに認識したのである。張仲寅へのインタビューによれば、「わたしの(階級 引用者)成分が高かったから、誰も合作する人」があら

ず⁸⁸⁾、邢永利へのインタビューによれば、互助組、初級合作社の時は個人の時と比べて「少しよくなったが、私は入らなかつた」⁸⁹⁾。楊正(中農、解放前の保長)の息子楊慶余は、「父は解放前村の幹部だったが、(解放後に 引用者)地位が低かつたので、やっと入社できた。(中略)その頃の入社には貧農や下層中農は必要とされたが、地主と富農は不要とされた。」と述べた⁹⁰⁾。

後夏寨村でも、初級社ができた時、「地主と富農以外」の村民が参加し⁹¹⁾、その時、中農も貧農に接近したが、その理由は「参加することを光栄だと感じたから」であり、「最後に集団に参加したのは、富裕中農」であった⁹²⁾。

地主、富農は互助組と初級合作社への参加ができなかつた。これは一種の政治的差別にほかならず、村落においてその地位の低さが際立っていた。逆に、当初党員・幹部と貧農によって編成された互助組及び初級合作社は国家の支持を受けており、これが中農に政治的な圧力を感じさせ、貧農に近づくことを「光栄」と感じさせる原因となった。

集団化の中で、国家による直接的な動きは、政治動員と利益の誘導のほかに、政治圧力によるものがあつた。それは「反右派運動」であり、後夏寨村の馬天祥へのインタビューによれば、一九五六年の高級社の成立時、「当時も参加しないものはいた。五七年の百花齊放の時は大騒ぎで、「毒草」もあつた。社を分ける騒ぎがあり、春には北京に上京して社を離れる者もでたが、秋にはまた戻って全員社に参加した」。その理由は「形勢(情勢)が逼迫していたのだ。彼らには、社を離れることは「毒を放つ」ことだ、入らなければ良くない、入らなければ右派をつくることになる」と説得した。」からであつた。村自体には右派の活動はなかつたが、当時

の状況により、「右派反対のスローガンはあつた。」という⁹³⁾。馬鳳来も、一九五七年に「反右派運動」が起き、生産条件の良い者に対して「思想的に落後分子であるとして教育がされた。」と述べている⁹⁴⁾。

呉店の郭仲安のインタビューによれば、村落の政治運動の様子は、「反右派」の時、「農民だから何の認識もなく、新聞に従つて」行つており、「あの頃は共産党の道を歩まなければ、すなわち反社会主義だつた」⁹⁵⁾。その当時、村落でよく夜に会が開き、「階級闘争や反右派闘争をやつた」⁹⁶⁾。

かつては一般的に、反右派闘争のような政治運動が農村に波及することは極めて少ないと考えられていたが、実際には、このような全国的な政治運動の高い圧力の下では、たとえ農村にこの種の闘争の対象が存在しなかつたとしても、国家からの大量の政治宣伝と基層幹部の現地の連係に基づく説明や解説に、農民は強大な圧力を感じるようになっていた。

おわりに

集団化の初級段階の互助組と伝統的な「搭乗」には本質的な違いはあつたものの、華北農村の集団化は主として国家が行政命令及び利益誘導を利用して推進した。これは国家権力の強大さを物語っている。互助組と初級合作社の組織化の過程では、党員と村幹部が中心となり「先進分子」を組織し、国家の集団化の要求に応じていた。これとは逆に、互助組と初級合作社に参加しようとしなかつた者(落後分子)と参加できない者(地主、富農)は徐々に孤立化していった。土地改革によって形成された階級区分間の差別は政治的地位として再認識された。「政府 村幹部 先進分子 落後分子」という

序列は「政府 貧農・下中農 中農・富裕中農 富農・地主」という序列と重なった。国家権力を中心に、村落の人的結合が再構成されたのである。

しかし、党員と村幹部は国家の呼び掛けに応え、互助組を組織する時も、個人の人間関係を利用した。主として個々人の関係即ち友人、隣人、同族などを通じて集団を結成したのである。農民の互助組参加は、当初単なる経済的利益からではなく、個人的感情の関係から合作の相手を選択しており、「関係の良いものが一緒になり」、「気の合うことが第一」であった。党員と村幹部は国家の行政命令を執行する一方で、村落社会に内在する支持基盤からも離れることができなかった。その中では伝統的な社会関係(相互扶助、友情)の存在が示されている。

中国村落における社会結合の構造には上田信氏の「砂鉄の理論」が存在する。村落には、同族関係・行政組織などの様々な回路が形成されていた。回路に電流が流れると、そこに磁場が成立する。この中で最も電圧が高い回路は官僚機構である。一九五〇年代においては、互助組の結成に際して、国家権力と繋がる党員と村幹部の回路の電圧がもっとも高かった。しかし、村落内の回路は平行するものではなく、互いに結ばれており、さらに党員と村幹部は村落内の他の回路にも繋がっていた。党員と村幹部は国家権力の回路の高い電圧の力に基づいて、自分が所属する村落内の回路と繋がり、国家権力を中心として、様々な人間関係を含む磁場を形成した⁹⁷⁾。

本稿は互助組の結成から国家権力と人間関係との関係を考察した。互助組の結成は国家権力を中心として、既存の人的関係(宗族、互助、近隣、友情など)を利用して農村部の社会結合を再編成された。従って、中国における国家権

力と人間関係との関係について、次の二点が指摘できると思われる。

第一点は、国家権力は、村落社会結合の中核であるということである。一般的な社会人類学的調査と異なる視点から中国の社会結合について考察する際、最も核心となる問題は、国家が存在する状況下の地域の範囲内における社会秩序の維持と国家権力との関係である。こうした視点から見た場合、中国では国家権力が村落社会結合の中核であったことが分かる。社会結合は個人関係によって構成され、リーダー格の人物は固定されていなかったため、国家権力に対抗する組織は形成されにくかった。国家は村落社会の再編に圧倒的な力を持ち、保甲制・郷里制・郷地制から集団化・人民公社に至るまで、国家の村落に対する再編は、リーダー格の人物に対するコントロールから地域に対するコントロールまで及び、さらには人々の生産・生活までも制御し、国家権力は村落社会の隅々にまで拡大していた。

第二点は、国家権力と社会結合は個人的な関係によって交錯し、国家は社会に対して完全に整合的な政策を実施することはできなかったということもある。中国における社会結合関係は、「共同体」のように固定的なものではなく、権力や個人の利益と関連しながら柔軟に再建されたものである。華北村落における国家権力と社会結合との関係についてみれば、社会結合の代表者(リーダー格の人物)のみが国家権力と接触する形態、国家権力が直接的に個々人と繋がる形態ではなく、国家権力はリーダー格の人物を通じて社会結合の中に拡張・浸透していた。個々人は、国家権力関係を含むすべての社会関係を利用して、自己を中心とするネットワークを構成しようとしていた。国家も様々な社会関係を利用してその統治を強化しようとし

ていた。華北村落における国家権力と社会結合の関係は個人的な関係によって交錯しており、社会結合は国家権力をめぐって展開されていた。国家権力は社会結合を通じて社会に対する統治を行う時、様々な社会関係の力を借りる必要があった。そのため、このような国家の意思と政策は、社会結合の中で変形されてしまうこともあり、その結果、国家と社会との不整合が生じていた。国家が社会を制御しやすい状況にあった反面、国家の意思は人的結合による濾過を受け、拡大・縮小あるいは歪曲・変更を被ることになった。国家権力が強制的・表面的な形で社会をコントロールするのに対して、社会の内部ではその国家の意思に対して柔軟かつ選択的に対応がなされていた。

注

- 1) 石田浩(1993年)『中国農村経済の基礎構造』晃洋書房、67ページ。
- 2) 内山雅生(2003年)『現代中国農村と「共同体」』御茶の水書房、155ページ。
- 3) 中国農村慣行調査刊行会編(1952~1957)『中国農村慣行調査』全六巻、岩波書店。
- 4) 三谷孝編(1993年)『農民が語る中国現代史』内山書店。
- 5) 三谷孝編(1999~2000年)『中国農村変革と家族・村落・国家 華北農村調査の記録』(全二巻) 汲古書院。
- 6) 末広庵太郎(1952年)『末広博士の調査方針』、中国農村慣行調査刊行会編(1952年)『中国農村慣行調査』第一巻、岩波書店、17-32ページ。(以下、『慣行調査』と『華北農村調査』の注の表記方法は『慣行調査』或いは『華北農村調査』 巻、 ページという表記方法を採用)。
- 7) 三谷孝(2001年)『序論』、三谷孝他(2001年)『村から中国を読む』青木書店、8ページ。
- 8) 末広庵太郎 前掲注。
- 9) 三谷孝(1999年)『序論』、三谷孝編(1999年)『中国農村変革と家族・村落・国家 華北農村調査の記録』汲古書院、6ページ。
- 10) この一連の調査は文科省科学研究補助金、三菱財団人文科学研究補助金、トヨタ財団研究補助金の交付金を受けて実施された。
- 11) 基盤研究(B)「中国内陸地域における農村変革の歴史的研究」(研究代表者:三谷孝・一橋大学教授)。
- 12) 基盤研究(A)「近現代中国農村における環境ガバナンスと伝統社会に関する史的研究」(研究代表者:内山雅生・宇都宮大学教授)。
- 13) 内山雅生、三谷孝、祁建民「中国内陸農村訪問調査報告(1)」、『研究紀要』長崎県立大学国際情報学部 第11号 2010年。「中国内陸農村訪問調査報告(2)」、『研究紀要』長崎県立大学国際情報学部 第12号 2011年。行龍ら(弁納オ一訳)「山西省農村調査報告(1)-2009年12月、P県D村」、金沢大学環日本海域環境研究センター『日本海域研究』第42号、2011年2月。弁納オ一「華北農村訪問調査報告(3)-2009年12月、山西省P県D村」、金沢大学環日本海域環境研究センター『日本海域研究』第42号、2011年2月。田中比呂志「華北農村訪問調査報告(1)」、『東京学芸大学紀要(人文社会学系)』62集、2011年1月。
- 14) 『華北農村調査』一巻、90ページ。
- 15) 『華北農村調査』一巻、107ページ。
- 16) 『華北農村調査』一巻、94ページ。
- 17) 『華北農村調査』一巻、182ページ。
- 18) 『華北農村調査』一巻、190ページ。
- 19) 『華北農村調査』二巻、98ページ。
- 20) 『華北農村調査』二巻、451ページ。
- 21) 『華北農村調査』二巻、473ページ。
- 22) 『華北農村調査』二巻、556ページ。
- 23) 『中国内陸地域における農村変革の歴史的研究 平成17年度~平成19年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書』(平成20年5月)41ページ。
- 24) 同上、43ページ。
- 25) 同上、66ページ。
- 26) 同上、71ページ。
- 27) 同上、73ページ。
- 28) 同上、81ページ。
- 29) 同上、136ページ。
- 30) 田中比呂志(2011年1月)「華北農村訪問調査報告(1) 2009年12月、山西省P県D村」、『東京学芸大学紀要 人文社会科学系II』第62集、125-132ページ。
- 31) 行龍ほか(2011年3月)「山西省農村調査報告(1) 2009年12月、P県の村」(弁納オ一訳)、『日本海域研究』第42号、95-112ページ。
- 32) 搭套については、『中国農村慣行調査』中に「驢馬の体を繋ぐ縄を套という。搭は互いに交わること。『搭伙種地』という言葉がある」(『慣行調査』第一巻、121ページ)という解説文が付されており、このような相互扶助は中国農村では太古から存在し続けてきたものである。宋代には「弓箭社」、元代には「鋤社」などと称されてきた搭套は、さらに換工、伴工、工班、集工など「いづれも農耕作業に際して行はれる相互援助の名である」という。清水盛光(1951年)『中国郷村社会論』岩波書店、399ページ。
- 33) 『華北農村調査』一巻、756ページ。
- 34) 『華北農村調査』一巻、749ページ。

- 35) 『華北農村調査』一巻、632ページ。
 36) 『華北農村調査』一巻、854ページ。
 37) 『華北農村調査』一巻、864ページ。
 38) 『華北農村調査』一巻、737ページ。
 39) 『中国内陸地域における農村変革の歴史的研究
 平成17年度～平成19年度科学研究費補助金(基
 盤研究(B))研究成果報告書』(平成20年5月) 136
 ページ。
 40) 弁納オー(2011年3月)「華北農村訪問調査報告
 (3) 2009年12月、山西省P県の村」、『日本海域
 研究』第42号、113-121ページ。
 41) 『華北農村調査』一巻、151ページ。
 42) 『華北農村調査』一巻、166ページ。
 43) 『華北農村調査』一巻、416ページ。
 44) 「互助組の時には上級からやって来た指導者が村
 の幹部に加わった。各世帯が自発的にやっていたこ
 ろは『叉套』と呼んでいた。組織の中の指導者が上
 級に会議を開き、村の中で一つの互助組を組織し
 た。全て上級の決定によるもので、民衆は何もしら
 なかったし、そのようなつもりもなかったが、指導
 者が勝手に考え出して、上級から幹部が検査にやつ
 て来、互助組を成立させたのだ。」(『華北農村調査』
 一巻、737ページ)。
 45) 『華北農村調査』一巻、750ページ頁。
 46) 『華北農村調査』一巻、754ページ。
 47) 『華北農村調査』一巻、770ページ。
 48) 「農民はいつも旧来のやり方を守って、外へ出な
 いし、新しいものを研究しないからだ。互助組は政
 府の呼び掛けの結果だ。政府は何回も会議を開き、
 互助組の意味を説明し、動員した。そうして互助組
 は成立した。」(『華北農村調査』一巻、854ページ)。
 49) 「政府は皆を教育するにあたって、互助組に参加
 すれば、生活も良くなり、生産量が増大できると言っ
 た。」(『華北農村調査』二巻、333ページ)。
 50) 『華北農村調査』二巻、335ページ。
 51) 『華北農村調査』二巻、389ページ。
 52) 『華北農村調査』二巻、474ページ。
 53) 『華北農村調査』二巻、488ページ。
 54) 『華北農村調査』二巻、490ページ。
 55) 『中国内陸地域における農村変革の歴史的研究
 平成17年度～平成19年度科学研究費補助金(基
 盤研究(B))研究成果報告書』(平成20年5月) 15ペ
 ージ。
 56) 同上、93ページ。
 57) 弁納オー(2011年3月)「華北農村訪問調査報告
 (4) 2011年8月、山西省P県の村」、『金沢大学経
 済論集』第31巻第2号、193-208ページ。
 58) 『華北農村調査』一巻、167ページ。
 59) 『華北農村調査』一巻、182ページ。
 60) 『華北農村調査』一巻、190ページ。
 61) 『華北農村調査』一巻、330ページ。
 62) 彭正徳(2010年)『生存政治：国家整合中的農民
 認同 以1950-1980年の湖南省醴陵縣為個案』中国
 社会科学出版社、99-100ページ。
 63) 『華北農村調査』一巻、750ページ。
 64) 『華北農村調査』一巻、771ページ。
 65) 弁納オー(2010年7月)「華北農村訪問調査報告
 (2) 2008年12月山西省太原市・霍州市・平遥県農
 村」、『北陸史学』第五十七号、1-17ページ。
 66) 『華北農村調査』二巻、563ページ。
 67) 『華北農村調査』一巻、182ページ。
 68) 『華北農村調査』一巻、750ページ。
 69) 『華北農村調査』一巻、761ページ。
 70) 『華北農村調査』一巻、761ページ。
 71) 『華北農村調査』一巻、686ページ。
 72) 張麟富への聞き取り、『華北農村調査』一巻、637
 ページ。
 73) 『華北農村調査』二巻、331ページ。
 74) 『華北農村調査』二巻、333ページ。
 75) 『華北農村調査』二巻、488ページ。
 76) 『華北農村調査』二巻、490ページ。
 77) 『華北農村調査』二巻、473ページ。
 78) 『華北農村調査』二巻、597ページ。
 79) 『華北農村調査』二巻、565ページ。
 80) 行龍ほか(2011年3月)「山西省農村調査報告(1)
 2009年12月、P県の村」(弁納オー訳)、『日本
 海域研究』第42号、95-112ページ。
 81) 『華北農村調査』一巻、322ページ。
 82) 『華北農村調査』一巻、417ページ。
 83) 『華北農村調査』一巻、750ページ。
 84) 『華北農村調査』二巻、331ページ。
 85) 『華北農村調査』二巻、333ページ。
 86) 『華北農村調査』二巻、335ページ。
 87) 『農民が語る』、261ページ。
 88) 『華北農村調査』一巻、68ページ。
 89) 『華北農村調査』一巻、575ページ。
 90) 『華北農村調査』一巻、761ページ。
 91) 『華北農村調査』二巻、342ページ。
 92) 『華北農村調査』二巻、342ページ。
 93) 『華北農村調査』二巻、88ページ。
 94) 『華北農村調査』二巻、331ページ。
 95) 『農民が語る』、74-75ページ。
 96) 呉店郭仲安への聞き取り 『農民が語る』、74ペ
 ージ。
 97) 上田信(1990年)「村に作用する磁力について」
 橋本満・深尾葉子編(1990年)『現代中国の底流』
 行路社、125-170ページ。